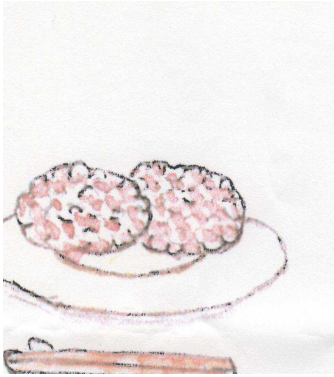

一部50円です

あずき



春に植えたあずきの苗が秋になると枯れた豆殻の中に幾つもの豆を実らせる。畑から引き抜いてきて軒先につるして乾燥させ、手で一つずつ豆殻を割って取り出す。

母が「よし、ちょっと手伝ってくれいや」と言うのでイヤイヤながらムシロの上に積まれたあずきの横にすわって皮をむく。豆殻の中には7粒ぐらいのあずきがいっている。豆を傷つけないように、飛ばさないようにするのだがつつい飛ばしてしまう。

あずきは貴重な換金作物で、時たま来る行商人に少しずつ売る。コメもそうなのだが街から来る行商人に頼まれて少しずつ金に換える。一度に売るとはなかった。農作物は大事な宝みたいなものだから、少しずつ少しずつ使ったのである。

餅を作るときには、あずきはかけがえのない豆であった。あずきから作るアンが一番うまい。ソラマメやサツマイモ、栗などから色々なアンを作って食べていたが、やはりあずきが最高である。何かがあると、数日前からあずきを水につけておき、早朝から母はあずきを入れた鍋を七輪にのせて炊く。時間をかけて煮詰まってくると、砂糖と少しの塩、砂糖の代わりにサッカリンの粒を入れることもあった。

山奥の生活は店もなく楽しみがすくない。そんな退屈な日々にしらなれど、楽しみを与えてくれたのは餅を作ることだった。もち米を蔵から出して来て炊いて臼でついてあんころ餅や大福もち、もち米を炊いて作るぼた餅。ぼた餅は大きくて一つ食べれば腹が膨れそうな代物だ。そんなのをいっぱい作って隣近所に配ったり届けたりする。

餅つくりは度々していた、雨が降って暇なときにも母は「餅でもつくるか」と言う。私が「あずきはあるん？」と聞けば「ああ、つけたる」「ほんなら、しょうか」と言ったぐあいだ。

先日、製菓業の主人と話してたら「丹波のあずきは高いから、北海道産を使っている」と聞いた。そうだったのか、私は高級なあずきをたらふく食って大きくなったのだと思い返した。(嘉)

死をめぐるあれやこれ(4)

石川 吾郎

「今日は死ぬにはよい日だ」(続)

前回、アメリカ先住民のこの言葉を表題にした次の詩を紹介した。

「今日は死ぬにはとてもよい日だ。／あらゆる生あるものが私と共に仲よくしている。／あらゆる声が私の内で声をそろえて歌っている。／すべての美しいものがやってきて私の目のなかで翹っている。／すべての悪い考えは私から出ていってしまった。／今日は死ぬにはとてもよい日だ。／私の土地は平穏で私をとり巻いている。／私の畑にはもう最後の鋤を入れ終えた。／わが家は笑い声で満ちている。／子どもたちが帰ってきた。／うん、今日は死ぬにはとてもよい日だ。」(Nancy Wood, Donald Leary) ◆この詩を翻訳して、作家であり料理研究者である丸元淑生氏は、次のように語っている。「こういう死は病院では迎えられない。笑い声にあふれたわが家で、老人はいま死と対面をしているのだが、心にあるのは美しいもの、内なる歌声、そして生命への慈しみである。それは星の降る大地の上でしか、見ることも聞くことも感じることもできないのかもしれないが、誰しも天寿を全うしたときには、これに似た幸福感が得られるのではなからうか。死とはまさに生涯をかけての達成なのである。」(丸元淑生「地方色」) ◆これは、死についての非常に美しいイメージである。丸元氏のこの文章は氏の死生観が現れていて、まさに「かくありたき死(と生)」を語っていると思う。「死とはまさに生涯をかけての達成なのである」という認識には、私も烈しく同意したい。◆しかし私はこの句に、依然として不気味なもの、「何か違うもの」を感じ続けていることを否定できないでいる。それが何かは、今の私にはわからない。(尚丸元淑生氏の最期については、ご子息の康生氏の「死ぬのによい日だ」『ベストエッセイ集死ぬのによい日だ』(文芸春秋社)所収)を読まれることをおすすめします)

元気の素は

足立「あだち」という性の多い丹波。「同級生の足立です」元気な声にびっくり。

「どうしたんや」

「てるこはん、散々迷ったんや」

「何を」

「車の更新や、もう80歳に近いやし、もしという事がなきにしもあらずやろ」

娘達は、「よく考えや、もう年のやからなあという。寝てもさめても、その事ばかり考えてな。あんたの意見も聞こうかと思うてな…。電話したんやけど」。

さあて困った私に相談もちかけられても、私の返事如何によって決めるんかいな。

四方山に囲まれ、買い物にゆこうにも、自転車又は自家用車、現代は、一戸に1台、2台と車がある世の中。日野原先生の著者「人生100年私の工夫」

年だからと、諦めたり閉じこもったりしない。ストレスが生きるために必要な糧となる事が多い。足立さんにとっては、その手段となる運転免許は手放しがたい。よく気持ち分かるだけに、足立さんの言い分だけ聞くことにした。2, 3日した

ら、又電話があり、

「更新することにしたわ。丹波へ来ての時は、電話してや。柏原まで迎えに行くから」

うれしい言葉である。

でも私も迷った。交通事故の過半数は高齢者がしめていることは心すべきである…。

学び

年をとると、人はおとろえる、そう思いこんでしまう。でも人間には加齢と共に又違った能力もあるのではないだろうか。

たとえば、これまで蓄積して学んだことや、経験を生かして、いろんな事の解決に役立てる。さて、自分の頭を整理してみよう。「加齢」「老化」は違うらしい。

たとえ物おぼえは若い頃のようにいかなくても、自分自身の体験を重ね合わせ理解すれば、いいのではないだろうか。

「あなたの言っている事はよく分かる」というものの、でもそれぞれに育った環境が違うからという。

生活する中で苦労して学んだこと、自分から行動する中で得た経験。

これらすべてが折り重なって、人生の荒波を生き抜く力がついて、一生涯色あせることもないだろうと思う私は！

母の味

手間とひまと愛情をこめた母の味。背中を丸めて味噌部屋に閉じこもり加減を見ていた後姿がくつきり浮かんでくる。

自分もその年になったもの、息子がいう

「母の味付けは全部、丹波の味や」煮物から塩昆布の味付け、神戸にいる孫が、おばあちゃんの塩昆布が美味し、と言ってくれる。ただ、甘味なしの醤油味だけなのに。

でも私にとっては嬉しい言葉である。

釘煮の時期が到来すると、上手に味付けして送ってくれる。私には此の釘煮は、とつても出来ない。早速、電話で

「釘煮ありがとう、とつても美味しい。又たのみますわ」とおせじを添えることを忘れないバァーさんである。

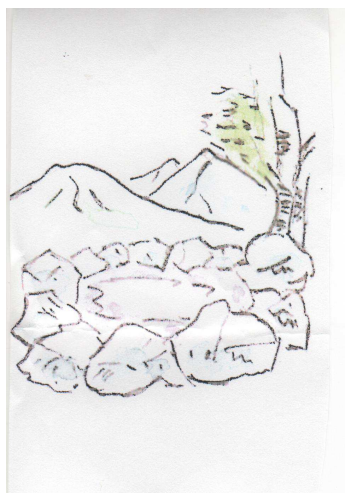
おんなの頑張り

20年10月5日、夫は白き煙となつて星々の世界に行き早7回忌をむかえた。

山あり、谷ありの生活の中に、5人の孫に恵まれたことは、財産よりも、

命と命の絆といえると思う。女は強い。男は大きな赤ちゃん(ああ失礼)。最後は女性、どんな苦労があつても、日本の底力は、みんな女性の頑張りがかつている、というのは、言いすぎなの。遠き戦争では、親より先に戦死した命も数知れず。私の心の中に生きた人達も早や卒寿を間近に迎えて元気で生かしてもらっていることに感謝。

これでいいのだろうかと遠き空を眺めて感深い物思いにふける一人の老女の姿である。



俳句

土田裕

古寺の搭くろぐるりと秋夕焼
濃く薄くまだら模様紅葉山
白光の伊吹の釣瓶落としかな
診察の窓口飾る室の花
埒もなき話またぞろおでん酒

迷走の世界

万博公園の外周を走る車のライトが流れていく様を、一二階の病棟から見ながら、よっちゃんは迷っていた。

今日の血液検査でCPKの数値が少しは下がったが、期待していたような数値ではなかった。一〇〇〇を切らない。八〇〇ぐらいに下がっていて欲しかったのだ。

入院してから、ステロイド剤の大量投与で大分下がってきたのだが、医師の所見では

「ふむ……。なかなか下がりませぬね」という期待外れの数値なのであった。週二回の血液検査は、学校のテストと同じで一喜一憂させられる憂うつなものである。五〇〇〇から一〇〇〇まで下がったから良いじゃないかと素人目には思うのだが、医師はもっと下がらないといけないと言う。

「このまま下がらないと免疫抑制剤という薬を使わないといけないが、この多発性筋炎は再発する可能性が高く、再発した時には、今のステロイドを増量するか違う薬を使う必要がある。使える薬は限られているから、予備で使える薬を出るだけ残しておきたいのだが」と医師は真剣な顔で言う。

よっちゃんは、免疫抑制剤という薬から抗がん剤を連想した。

店に来ていたガン患者の人が言った言葉思い出したのである。

「抗がん剤は恐ろしい毒だ。黄色い点滴用の袋には毒と書いてあるのよ。私が点滴を受けていた時に、何かのはずみで液がこぼれた時など大変だったわ。看護師さんが急いで手当てをしてくれたが、抗がん剤の液に触れた皮膚は爛れたわ。」

この人は、重症のガンにかかり数年前から大学病院に入退院を繰り返していた。抗がん剤は、がん細胞を殺すと同時に正常な細胞も殺す。急激に増殖するがん細胞を殺すには、強い毒をもって殺す以外に方法がないらしい。

免疫抑制剤も似たようなものではないかと、よっちゃんは考えた。ステロイドは副腎皮質ホルモンと同じ作用を持つように作られた薬だから、まだ毒性は少ないはずだ。それでも副作用は強かった。

薬の影響か病のせいかわからないが、顔や胸に赤い斑点が出来、目も一部充血し、足はやせ細り、声もしゃがれ声、顔も胴体もパンパンに腫れあがった。夜も寝むれないし、寝返りを打つのも痛みを気にするようなあり様であった。入院する前よりひどくなっていた。

外の気温が少し下がっただけで、よっちゃんの体調は変化した。敏感に寒さを感じ始めたのである。足先が冷えて靴下をはき、看護師にたのんで小さな電気カ

ーペットを足元に置いてもらった。敷布団も二枚、掛布団に毛布を重ねた。院内の空調は二五度に設定されているのだが、外気温の変化が敏感に身体に伝わってくる。元気な時には思いもよらないことがある。

一方、ノツポさんは、順調に数値が下がってきている様子で、あとひと月ぐらいで退院出来そうだと言っている。ステロイド剤も三〇ミリぐらいらしい。よっちゃんより一回り若いノツポさんを見て、若いから回復も早いのだろう、俺は歳をとっているからなあ、とよっちゃんはうらやましく思うのである。

よっちゃんの担当医が変わった。毎月新しい研修医が担当になる。今度の研修医は平医師である。彼は四国の大学を出てH大学医学部の大学院に入ってきた。アレルギー科の専門医になるためである。「今は、博士号なんかあまり意味はないですね、専門医の資格が重要です」と言う。

大変まじめで熱心な二九歳の青年であった。彼は、医局では新米なので雑用をいろいろさせられるから大変だとボヤキながらも真面目にコツコツと診察してくれた。

彼は、毎朝、よっちゃんのベットへ来ては、「おはようございます。ちよっと胸を診させてください」と言いながら、聴診器をよっちゃんの胸にあてる。彼が気にしているのは、よっちゃんが併発した

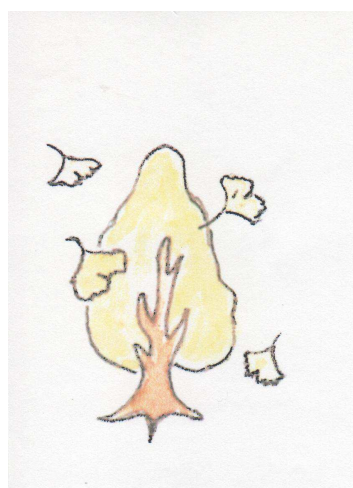
間質性肺炎の進行ぐあいをチェックするためである。

この間質性肺炎も難病である。急性だと一ヶ月で死に至る恐ろしい病気らしい。有名な歌舞伎役者が亡くなったニュースを聞いた時も、たぶん同じ間質性肺炎ではないかとよっちゃんは想像した。

免疫抑制剤を使えば、ガンを併発する可能性がある、と聞いた。ガンを併発するにつけてくれている細胞をも抑え込むからだとか。

よくは分からないが、ステロイド剤だけで薬は十分で免疫抑制剤はご免こうむりたい、とよっちゃんは思っていた。

ひと夏を病棟で過ごし、初秋の冷気を吸いながら、やっかいな病になったものだ、と思うのである。病院の公園には色づき始めた花梨の実がいっぱいになっている。黄色いその実は、場違いな感じにも思えるのだが、芝生に植えられた木の姿は、どこかしら、よっちゃんの心をメルヘンの世界へでも誘ってくれるようにも思えた。



違いがわからない中高年…の巻

昔インスタントコーヒーの宣伝で「違いがわかる男のコーヒー」というのがありました。確か、ネスカフェ。で、話は現代に飛ぶのだが、場所は大阪市役所、十月某日。

S 「アンタが言い出したことだろ！」

H 「アンタじゃねえだろう」

S 「じゃ、お前でいいのか」(中略)

H 「お前なあ…」

S 「お前って言うなよ」

H 「うるせい、お前」

S 「おい、何だよ、それ」

こんなやりとりがあったとニュースでやってみました。どっちが大阪市長で、どっちがヘイトスピーチの親玉なんだか、違いがさっぱりわからん。だから一応インシャル、入れときました。Sは在特会の桜井 誠。Hはいわずと知れた、橋下徹(ニュースを見ていなかった人に、簡単に説明しますと、韓国人や中国人を誹謗中傷するような街頭演説をしている方の代表が桜井。「大阪で差別的な活動をするな」と文句を言っているのが橋下市長)。

のつけに、このやりとりだったから、当然、話し合いなんてものにならず、

H 「お前、勘違いすんなよ」

S 「それはお前だろうよ」(中略) H 「お前みたいな許せねえって言うてんだよ」

S 「だったら、やってみろや、男だったら一対一で」

両者が立ち上がり、あらら、殴り合いですか?というシチュエーションになったところで、市長側のお付きの人たちが止めに入っ、暴力沙汰はナシ。でも、まだ続く。

S 「たかが一地方の首長(クビチョウと読みます)ごときでぶざけたこと言うなよ」

H 「じゃ、お前、立候補して当選してみろよ」

S 「政治にまったく興味ないね。政治家ってのは、この世で最も醜悪な人種だと思ってるんだ」

H 「当選してから言え」

確か、こんな言い合いっこもしてはりました。きやははは!

わたくし、自慢ではないが、市長を含め政治家がだれか民間人と話した、なんてことにはいままでも何の興味もなかった。

どうせ適当なこと、つまり秘書だか総務の人だか知らないが、その種の人たちが書いた模範解答(可もなく不可もなく、上げ足を取られない程度の返答)を肉声風に語るだけで、語っちゃった後は一分で忘れよるのであるうと思っていたからだ。でも、今回ののは違っていた。「うっそー」

と言いたくなるほどの本音の応酬。中学生レベルだろうが何だろうが、人間性丸出し本音のバトルだった。面白過ぎる。

立場をハッキリさせておくと(別にどっちでもいいんだろけれど)、私はヘイトスピーチ反対派である。中国領事館に近いうところに住んでいて、ヘイトスピーチの騒音に日常的に悩まされているという特殊環境に身を置いている、ということもあるが、なんか卑怯だと思っからだ。

街宣車だか何だか知らないが、そんなものに乗って、大声で口汚いことを言う。

「アンタの親は、アンタがそんなことしてるの知ってるのん?」と聞きたい。関西人として、「その活動をして、だれがトクするのん? だれかにお金もらってるのん? そのガソリン代、だれが出してるのん?」とも聞きたい。

桜井だったら(もちろん、呼び捨てである。なぜならば、私の方が年上だからだ。この国では、年上は絶対なのだ。気に入らなきゃ、出て行け!とまでは私は言わないけれどね)、「正しいことを言ってる、何が悪い」とか言って反論するんだろけれど、じゃ、アンタ、海外で日本人がそんなこと言われて、嬉しいか? 「ご不用になりました日本人がいましたら…」なんて言われて、「げっ」と思わないのか? 海外で生活している日本人はいっぱいいるんやからね。仲良く暮らせばいい、と日本人のことなら思っんやったら、

韓国の人も一緒やないの。

教科書に載ってるから小学生ならみんな知ってることだけど、仏教とか漢字とか中国、韓国を経て日本にもたらされたものはものすごく多いんだって。いちいち感謝しながら生きなくてもいいだろうけれど、失礼なことは言わない方がいい、と私は思うよ。多分、おおかたの庶民はそう思っていると思う。もちろん、誰にでも好き・嫌いはある。でも、それはみんなで寄ってたかって街宣車に乗ってまで「わあわあ」言うことじゃない。マナーってものがあるからね。

民主主義って桜井は言ってたけど、ヘイトスピーチって民主主義から一番、遠いところにあるもののような気がする。私が思う民主主義は「みんながそこそこ幸せ」ってことだから(「すっごく幸せ」は個人の努力)。

あ!そうそう、桜井に一番言いたいこと忘れてた。市長は「国政を預かっている政治家に言え」とか「個人を特定して法的手段に訴えろ」とか弁護士らしいことを言っていたが、私が言いたいののは、「韓国に言いに行けよ」ってこと。北朝鮮でも中国でもいい、とにかく現地で当局の人たちに、その主義主張を語って「日本から引きあげさせろ!」と言ってくれば? 正しいことを言っているという自信があるんだったら、別に怖くないでしょ? ボコッボコにされても私は知らんけど。

伊藤 明(精神科医)
家庭内のコミュニケーション(2)

言いたいことがあるのに、伝えることができないで、自分の内部だけで悩む、という状況を少なくするには、言葉によるコミュニケーションが大切だ、ということをお話ししました。この考えをさらに一歩進めると、相手に自分の言うことを聞いてもらい、自分の希望する方向へ動いてもらう、というように変わってもらうためにはどうすればよいか、という問題に行きつきます。これはなかなか難しいことです。

これを考える前に、まず家庭のなかの人間関係の特徴に目をむけてみましょう。家庭の中で生活をともにしている、夫婦や親子の人間関係は、往々にして固定化してくる傾向にあるものです。固定化というのは、ある種のきまつたパターンがある、ということ。自分がこういうことを言うと、相手は「こう反応するだろうに決まっている」、というふうに、ある程度は推測できることがあるものです(そして実際そうなったりする)。これは相手の「こころの先読み」をしている、ということになるでしょう。

家庭というものは、「こころの先読み」を発達させる場であるともいえるでしょう。もともと、これはすべて否定されるべきものではなくて、うまく機能するときには、相手に対する「思いやり」という

形で発揮されることとなります。しかし度を越えてしまうと、「うつ」に陥りやすくなります。

家庭内では、人間関係の固定化とともに、役割も固定化する傾向にあります。

夫婦の場合、昔ならば、夫は会社へいってお金を稼いでくる、妻は家で炊事やそうじ、育児などの家事をするなど。夫婦共働きの場合でも、家事の分担がほぼ決まってくるものです。一旦そういう分担が決まって固定化してしまうと、それが「やって当然」というふうになりがちです。その期待は実行されてあたりまえという雰囲気になり、評価の対象とはならなくなります。その期待が裏切られたときは、叱責の対象となってしまうのです。こうして、評価の言葉の使用基準は上がっていき、めつたに「ありがと」「ごころうさん」といった言葉が使われなくなってしまうのです。いってみれば、夫婦は日々、お互いにその限界を確かめ合っている、というところがあるのではないのでしょうか。このような中で陥りがちな悪いパターンは次のようなものです。

何かを期待して、それが裏切られることがある↓その不満を表現しない、あるいはできない↓それが何回もかさなってくる↓相手に対するあきらめが生じて来る↓「限定された関係の夫婦」として固定する。

これはかつて妻の側が、夫に対して抱くパターンに多かったものです。夫は、妻のそういった気持ちに気づかないまま何年も過ごし、妻は不満をためたままで

過ごす、という具合です。人間は夫婦といえども、ほかの人を完全には理解できるはずのないものである以上、限定された固定化した関係、というのはいかたがないことで、逆に言えばそれは相手についてよく理解しているからこそ成立する人間関係だといえるかも知れません。

しかし「この人には、これ以上話しても、わかってももらえない」というようなあきらめが広がると、共感できる場面もすくなくなると、こころが離れていくということになります。家族の人間関係の固定化は、安定という側面からは一定プラスに作用しますが、過剰な「あきらめ」感を誘発してくるようになります。そして不満を改善できずにそのまま拡大していくという道をたどりやすいのです。

このような固定化に陥らないためには、どうしていけばいいのか。これはなかなか難しいことです。家族などの小さな人間集団の中で、人間関係をうまく維持して相手に自分の都合のよいように動いてもらうための「作戦」というものがあり得る、ということを認めていくことがまず必要といえるでしょう。相手を動かしていくための方法として、まず考えられるのは、本音を言う、といことでしょう。しかしこれはいつもうまくいく方法とはかぎりません。うまくいくためには、それをうけとめる相手の条件が必要になってきます。

かといって、自分の意志を伝えず、被害者意識をつのらせていくのはうまい方

法とはいえません。相手を教育していくという積極的な発想が必要になってくるのではないのでしょうか。一つの方法としては、固定化したパターンを少し変えて、相手の予想をよい方向へ裏切って、「オヤッ」と思わせるような反応をしてみるわけです。これまで奥さんがお茶をいれてくれても何も言わなかった「ご主人が「ありがと」と言ってみるであらうか、そう言われた奥さんは「おや、気持ちが悪い、雨でもふるんじゃないの」と言ったりしないで、にっこりしてみるであらうか。知らず知らずのうちにはまり込んでいる固定化した反応から脱却するというわけです。

相手を動かしていく、変えていくということは、実は精神科の治療をしていく上でも最大のテーマです。しかしこれは常に可能というわけでも、完全に變えることができるというわけでもありません。私はせいぜいのところうまくしても相手の五パーセントを變えることができれば、上々と考えています。

またその方法を考えるときいつも教訓的なのは、イソップ物語の「北風と太陽」のお話です。これはみなさんよくご存じの話ですが、北風と太陽が旅人の外套を脱がせられるのは、どちらかと賭けをします。北風は冷たい風をビュービューと吹きつけ、外套をはぎとろうとしますが、旅人は寒さのあまりよけいにしつかりと外套を押しさえて、身を包もうとします。一方太陽がポカポカと暖かい光

をふり注ぐと、旅人は自分から外套を脱ぎ、賭けはみごと太陽の勝ちとなった、というお話しです。つまりこの「太陽作戦」が相手の態度を変えていくための、原則的な方法といえるような気がします。相手が自発的に変わって行く、そのような環境をこちら側の言葉や態度によって作っていく、というわけです。

この場合に、とくに必要なのが、やはり言葉によるコミュニケーションです。感謝やねぎらいの言葉を出し惜しみしないでだしていく。それによって相手を変えていく、ということです。

このように考えていくと、自分の本音を表現していくことが、必ずしも常に最上の方法でないことがわかります。本音と多少違っていても、相手が自分に対してよい反応してくれるような言葉をかけていくのがカンどころといえましようか。

また夫婦の間では、おたがいの領分を尊重することが、求められるように思えます。どちらかが、相手を支配しようとする、どうしても問題が吹き出してしまう。

家庭の中で、相手の主導権を、ある領域で尊重していくことが重要だともいえます。その領域は固定的であるより、相手の状態によって、協力したり代わってあげたり、の配慮が必要になります。その場合でも相手の主導権を尊重することが必要です。いずれにせよ、相手を機能としてとらえるのではなく、人格として尊重するという姿勢が大切です。

南アフリカ

アパルトヘイトとサファリ

日本を離れてから早や一ヶ月。浮世離れた生活をしているせいか今は果たして何月何日かをも忘れまます。ましてやこは南半球、十二月といっても暑い夏。現にマダガスカルでもちらほら南国のクリスマスツリーを見かけました。さて二日はいよいよアフリカ大陸の最初の寄港地南アフリカのダーバンです。この地はバスコダガマが発見したかとかという大きな港町です。

南アフリカといえばダイヤモンドと喜望峰が思い起こされます。しかしここで思わぬニュースが飛び込んで来ました。十二月五日マンデラ元大統領がなくなつたという悲報です。なんとというタイミングなのでしょう。丁度、船に乗り合わせしていたセミナー講師の元新聞記者がマンデラ大統領にインタビューをした思い出を講演で語ってくれました。

アパルトヘイト、人種隔離政策は南アフリカで長年施行されていた人種差別で世界中から非難の対象となっていました。そのような時代、一九六四年に反アパルトヘイト運動により四六歳で終身刑判決を受けて投獄されたネルソン・マンデラはなんと二六年間も牢獄生活を続け一九九〇年釈放され、一九九四年大統領にな

りました。奇跡的なストーリーです。その間のヒューマンエピソードは沢山あり看守との心からの交流などは真に彼の偉大さの一片です。ひとりの人間の忍耐と寛容と希望が世界を動かすということがありうるということを彼は身をもって証明したのです。インドのガンジーをはじめ平和的な方法で世界を動かした偉人は数少ないのですがマンデラは正にその一人でしょう。大統領になってからもかつて投獄し差別した白人を非難するわけでもなく人種融和政策でもって南アフリカ共和国をアフリカで一番の安定した経済大国にさせました。

しかし、このアパルトヘイトをより深く知るうちに、この政策が単なる黒人差別政策ではなく、もつと本質的な歴史と差別があるということを知るようになりました。歴史とは単に記述された事実ではなく人間の理性の実現であると哲学者ヘーゲルが言ったようにもう少し人間的かつ複雑なものです。学校で習うようなマルバツ式の事実ではありません。

南アフリカという国家は他のアフリカの国と同様に近代になり西欧列強の植民地侵略により人為的に出現したものです。それ以前は国家というものはありません。宗教改革の時代に戻ります。一六世紀、有名なルターの宗教改革は一五一七年です。宗教改革とはご存知のようにカトリック教会の旧体制に対する改革運動です。ルターが起こしたのはその一つの派

閥、いくつもの派があったのです。特に急進的な改革派はこれらの改革諸派からも排斥されてヨーロッパ国々からも追い出されます。その一派は清教徒として船に乗ってアメリカ大陸にわたりアメリカ合衆国を建国しました。しかしその他も世界各地に新天地を求めて出国したのです。そのオランダ系の一派が南アフリカの喜望峰のたどり着き開拓をはじめました。当然その地にはアフリカの原住民がすでにいるのです。さて時は流れて一七世紀、ヨーロッパ各国は世界中の植民地をもとめてアフリカ大陸にも進出します。イギリスが植民地拡大でこの地にやって来た時に抵抗したのがすでに住んでいる、かのオランダ系白人の子孫たち、彼らはボーア人と呼ばれていました。一八八〇年と一九〇〇年に二度にわたり新たなヨーロッパからの侵略者イギリスと戦争をしています。これが歴史教科書にもあるボーア戦争です。結局イギリスはここを植民地にするのですがこの戦争で莫大な出費がかさみ、当時のロシアの拡大政策に打つ手を失くして、やむなく日英同盟を結びその目的を果たしたというおまけの話もあります。結局日本は大国ロシアに勝利したことにより、それ以後は勘違いをし続け遅れてきた帝国主義国として破局を迎えたのですが、それはともかく、白人による二重支配がアフリカには存在していたということです。現在このボーア人という名称はもう少し広く旧植民地

白人を含んでアフリカーナとよばれています。

さてアパルトヘイトに戻しましょう。

これは対黒人に対する単純な差別政策ではありません。先に説明したように差別は白人の間にもあったのです。植民地政策のため本国からやってきた白人と、もともといたアフリカーナ。アパルトヘイトは確かに黒人を隔離する政策であるがそれによってアフリカーナ達の不満を解消する融和政策でもあるのです。彼らより増しだという納得を与えるためです。

このように悲報を知ったきつかけで改めて歴史を勉強しながらダーバンに入港しました。ここでのツアーは英語クラスではじめての一泊旅行。つまり船は二日間停泊しているのです。ダーバンの街に入るとあちこちにマンデラの追悼の垂れ幕が出ていました。そしてかつては「白人専用」と立て札があった美しいビーチを後にし、郊外へバスは三時間も高速道路を走りズールーランドというズールー族の村に入りました。村といってもそこは観光施設、まあ映画村みたいなところなんです。でも本来のズールー族はとても勇敢でかつて侵略してきたイギリス軍と戦いました。先ほど勉強した旧白人ボーア人とのボーア戦争と同時期、一八七九年のこのズールー戦争、これはイギリス帝国と現地人との戦いでした。この時期はおそらくボーア人と現地人との争いも数多くあったことでしょう。こういう

複雑な侵略の歴史になると誰が本来の歴史を作ったのかということがわかりません。先住民は確実に存在したのですが、あとから来た侵略者は歴史や文化、文明は我々が作ったと土地の所有権を正当化します。パレスチナのユダヤ人国家イスラエルが典型的な例です。約束されていた地とはただ自分たちが勝手に都合良く書いた聖書によるだけなのですから。歴史の捏造が正当化の根拠ですね。

さて、ズールーランドは観光パーク。歴史ショーあり映画あり、いわゆる現地人スタイルの人々との撮影会あり、なんでもあります。夕食はアフリカンフードでアフリカンダンス。ドラムの音がお腹にずんずん来ます。そしてアフリカンススタイルロッジで一泊しました。

次の日は早く起きて世界遺産になっているセントルシア湿地公園へ行きボートに乗って川でカバやワニを見ました。二人ほど乗れる中型のボートですが運転手は白人。自らマイクでガイドをしながら船を操縦しています。おそらく、彼はアフリカーナでしょう。彼らはもともと土地所有階層でしたが、多くがアフリカ民族独立運動のなか先住民に土地を返すことを余儀無くされ、本国へ帰ることもできずに新しい生活手段を習得して生活しているのです。二重差別の一面を垣間見ました。

それからまた一時間ほどバスで走り、シユルシユルウエ動物保護区でお決まり

のサファリをしました。まあ私たちはラッキーなほうで象とライオン以外のメインの動物は見ました。昼でしたので動物も昼休憩が多いらしいです。ここは保護区なので希少な動物は繁殖させて他の地域にも移動しているようです。私たちは勉強も兼ねていたのでガイドは英語オンリー、日本語なし。まあ、動物を見れば大体のことが分かるし。Problemです。サイはBig。ですよ皆さん。と言うことでアフリカの大陸の最初は船から二日離れて久しぶりの陸上生活でした。といっても野生のアフリカなのですが。しかし何処に行っても人間の開発は限りなく浸透しています。もう本当の自然の地というのではないのでしょうか。こんなふうにアフリカといえばサファリや現地人、部族の民芸などが見学記のメインとなるところですが、この旅は人間を知るための旅。私もアフリカのサファリははじめてでしたがそれほど感動はしませんでした。やはり文明に守られた安全な体験はテレビで見ているのとそれ程違わないのかも思えます。

メリークリスマス！ダーバンから三日目の一二月二五日は同じく南アのケープタウンに寄港しました。アフリカ大陸の最南端の町です。そこからバスで二時間位のところに有名な喜望峰があります。しかし行ってはじめてわかりました。ここは「世界名所がっかり」のひとつだということ。まず、一四四八年にポルトガル人のバルトロメオディアスが到着した時には嵐の岬であったのが後になって希望の岬になったとか。しかも英語名はCape of Good Hope、「喜望」峰は日本語訳の誤植とか。そう言えば「喜望」なんて漢字はありませんよね。さらに決定的なのはアフリカ大陸最南端はここではなく一五〇キロも離れたアガラス岬だとか。そしてとうとうの喜望峰はただの小さな岬。宗谷岬の方がしつかりしていました。それに美味しいウニ井もありません。しかしそれでもここはインド洋と大西洋がぶつかり合う地。インド洋海上から霧が発生し大西洋の方へ岬をめぐり雲となつて絶えず流れていました。雄大な景色です。さて近くの海岸にはペンギンが沢山いてここはもう極地に近いこともうかがえました。ケープタウンの町の南には大きな岩山テーブルマウンテンがあります。町の建物はオランダ風で植民地時代の様子が残っています。また高台の丘には白人の高級住宅が並びまだ格差は依然として大きいと感じました。現地人はマンデラが亡くなってこの国はどうなるのか心配していました。すでに現地人である黒人の政権になって久しいのですが腐敗が進行しているといえます。もともとアフリカは部族単位で成り立っている土地。近代的国民国家とは相容れないのです。どこかに無理という道理が存在しています。ここにも世界の在り方、人類の生存の問題が関わっていると感じました。さらにアフリカの旅は続きます。

今回の話しは平安の都に出没した妖怪、百鬼夜行（ひゃつこくやこう）にまつわる話です。六角堂と一条戻り橋の京都の地名が出てきます。六角堂は文字通り六角のお堂。当時から観音信仰の寺として有名だったようですが、生け花の発祥の地としても有名で、傍らに池坊の本部が建ち、生け花関係の参拝者で今でもにぎわっています。一条戻り橋は、平安の時代には現世と冥界との境と考えられ（これより西は異界）、ここにまつわる妖怪の説話が多くあります。またこの近くには陰陽師で有名な安倍晴明を祀る晴明神社があり、近く的一条商店街では愛嬌のある妖怪人形を飾り「妖怪ストリート」として地域興しをしています。しかしこの話しでもっとも注目すべきは、透明人間が登場していること。世界文学の中で、透明人間が登場する最初の文献ではないかと私は考えています。ちなみに我々の知っている「透明人間」は、19世紀末のH・G・ウェルズの作品なのですが、その九〇〇年近くも前にすでに、日本で立派に「透明人間」が活躍しているという事実！（この事実が指摘されたのも、ひよっとして初めてかも）

百鬼夜行と透明人間巻二六ノ三

今は昔、これはいつの時代であったかは定かでないが、都に下つ端の若侍がいた。この若侍は日ごろ六角堂に参詣し熱心に信心をしていた。

ある年の大晦日、夜になって所用ができ

知人のもとに出かけていたのだが、夜更けて帰宅の途中に一条堀川の戻り橋をわたって西に行こうとしていた。すると西の方角から多くの人々が火を灯してこちらに向かってくる。「高貴な方がお通りなるのだらう」と考え、この男、橋の下に急ぎ降りて姿を隠した。その一団がやってきて、橋を東の方向へ通り過ぎるのを見上げていると何とこれは人ではなく、恐ろしい形相をした鬼どもが行進していくのだった。一つ目や、角を生やしたの、あるいは何本も手があるもの、さらには一つ足でピョンピョンはねる奴までいる。

男、これを見て生きる心地もせずあつげにとられていると、鬼の一団がまさに通り過ぎようとするそのとき、最後尾の鬼が「ここに人影があるぞ」と気づいた。「そのようなものは見えないが」、「すぐに捕まえて、引き連れてこい」と別の鬼が言う。「もうだめだ」と男が観念していると、一人の鬼が走つてやってきて、男をわしづかみにして橋の上に引き上げた。鬼どもの相談するに「この男はたいして重い罪を犯したわけでない、許してやろう」ということになり、四五人ばかりの鬼が男にツバを吐きかけて、そのまま過ぎて行つてしまった。その後この男、殺されずに済んだのを喜び、気持ちは動転、頭はガンガン痛むもの。「早よ家に帰つて、この事を嫁さんに話した」と家路を急いだ。家に着いて入ると、妻も子どももこの男を見るのだが、話しかけようとしな。また男が話しかけても返事をしようとしな。男、不審に思い近くに寄つてみるが、相手はそばにいてもいる

ように思わない様子。この時はつと気づいた。「そや、鬼のやつがワシにツバかけたによつて、ワシの身体は見えんようになつてもたんや。」そう気づくと情けなくなつてくる。自分には人が元のように見えているし、人の言うこともすべて聞こえている。ところが人には自分の姿は見えず声も聞こえない。だから人が置いた食べ物を取つて食つても気がつかない。・・・こうして夜が明けた。妻子は「ゆうべおとんは人に殺されてしもたんかも」と嘆きあつている。こうして日が過ぎていったが、いかんともしがたい。そこで男は六角堂に参籠をして

「観音さん、ワシをお助けてください。長年ワシは願をかけお参りを欠かしたことはおへん。そのおしるしにどうぞワシをもとのように、皆に見える身体にしておくんははれ」と祈つて、参籠の人々の食べ物や托鉢の飯などを取つて食つていたが、そばの人々は全く気がつかない。こうして一四日ばかり経ち、夜男が眠っていると明け方の夢にご本尊のとばりの辺りから高貴な僧が現れ、男の傍らに立ち次のように告げた。「おまえ、朝になったら速やかにここを出て、初めて出会つた者の言うことに従うのだぞ」と。このように言つたと思つと夢はさめた。

夜が明けてお堂を出ると、その門ぎわに牛飼いの下男が大きな恐ろしげな牛を引いていくのに出会つた。その牛飼いは、男を見ると「そこのおまはん、ワシに付いてい」と言う。男これを聞くと「ワシの身体が見えてるんや」と気が付いて喜びながら、夢のお告げに従つてこの牛飼いに付いて

いく。西の方角に十町ほど行くと、大きな棟門（むねもん）があつた。門は閉じて開かないので、この牛飼いは、牛を門に結わえて扉の隙間の人の通れないようなところから入ろうとする。男を引つ張り「おまはんも一緒に入れ」と言うので、男「こんな隙間からどうやって入るんや」と言うと、牛飼いは「文句言わんとつとと入れ」と、男の手を取つて引き入れると、男も一緒に入つてしまった。見渡せば家の中は広く、大勢の人がいた。

牛飼いは、男を連れて板敷きの廊下に入り、内にズンズン入つていく。「誰や」と咎めるような者もない。随分奥まで入つてくると、姫君が病気で苦しうに臥せている。枕元や足元には仕える女房たちが居並んで世話をしている。牛飼いは男をそこに連れて行き、小槌をつかませ、この臥せる姫君の傍らに座らせ、頭や腰などを打たせる。するとそれに合わせてこの姫君が頭を振り立てて苦しみをだえる。これを見た両親は「この病でお姫さんの命もこれまでかいな」となげきあつている。周囲ではお経を上げ、何とかという貴い修験者を呼んでくると騒いでいる。しばらくするとその修験者が到着した。臥せつた姫君の傍らに座り、般若心経を上げて祈ると、この男感激のあまり、身震いし総毛だった。

一方牛飼いは、この僧を見るや一目散に逃げていつてしまった。僧が不動明王の火界の呪文を唱え、臥せる姫君を加持すると、男の着物に火が付いた。見る間に焼けていくので、男は声を挙げて叫んだ。するとどうだろう、男の姿はすっかり見えるよ

うになったのだ。家の人々、姫君の両親はじめ女房たちには、随分下賤な男が病み臥せった姫君の傍らにいるのに気がつき驚愕し、とり敢えずこの男を捕らえて引出す。

「一体これは、どういうわけや」と尋問する。この男、事情をありのままに語りだすと、辺りにいた人々はみな、これにいっそう驚いた。

一方男が姿を現してから、臥せていた姫君はきれいさっぱり病いが癒えてしまった。一家の人々が喜ぶこと限りない。このとき修験者「この男には罪があるわけではない。六角堂の観音の御利益をこうむった者なのだ。従って早く放免しておやりなされ」と言うので、人々は男を逃がしてやった。

男は早速家に帰り事情を話すと、嫁さんは驚きながらも大喜び。あの牛飼いは疫病神の使者だったのだろうか。誰かの呪いによってこの姫君に取り付けて悩ませたのだった。

その後当の姫君もこの男も病気知らずに健康で過ごした。これは不動明王の火界の呪文の靈験あらたかなおかげである。観音の御利益にはこのような驚くべきことがあるものよ、と語り伝えられていることだ。《終わり》

《コメント》

「今昔物語集」の巻一六は観音の靈驗話を集めています。ここでは六角堂の観音さまをとりあげています。はじめに述べたように透明人間のアイデアが、日本の平安末

期の「今昔物語」の世界にまでさかのぼる点は、思うに世界初であり、世界文学史上特筆すべきことだと思えます。

さらにこの話の中には「一条戻橋の話」も盛り込まれています。一条戻橋は、昔から都と外部の境、この世と冥界との境をなすものとみられており、渡辺綱の妖怪退治の話（渡辺綱が橋上で美女に会い、その美女が鬼の本性を現したので片腕を切り落とした話。壬生狂言の演題としても残っています。ここでは、大晦日の百鬼夜行が登場しています。そして鬼の唾（つばき）が透明人間にさせるのです。

現在でも一条戻橋は、一条堀川に架っていますが、この百鬼夜行の面影はすでありません。ただ近くにある陰陽師・阿倍清明を祭ったことで有名になった晴明神社の境内に、昔のこの橋の名残が保存されています。

なお平凡社の「世界大百科事典」には次のように解説されています。

「京都の（一条戻橋）は、橋占で名高い。この橋は、死刑を執行する（果ての二十日）（二月二〇日）に罪人が立ち寄り、餅と花を供えて、次にこの世に戻つてくるときは真人間になれと申し渡されたところでもある。第二次世界大戦中は、出征兵士がこの橋を渡って出発すると、無事帰還するともいわれた。」

なお本文の会話を戯れに関西弁風にしてみましたが、不自然な点があるのはお許しください。小生、関西（京都）弁のネイティブではありませんので・・・こう言うほうがよいといったご指摘をいただくとうれしいです。

坂本一光

◆放射線の怖さ、そのエネルギー的考察

1 放射線の種類と人体への影響一般

はじめに、放射性壊変の種類と放射線の人体への影響一般について、野口邦和著『放射能のはなし』（新日本出版社、2011年）から要約引用して紹介する。なお、ここで取り上げる放射線は、 α （アルファ）線、 β （ベータ）線および γ （ガンマ）線だけである。

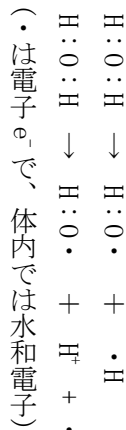
（1） α （アルファ）壊変

α 壊変（崩壊）は、質量数200以上の重い放射性元素の原子核に特有の壊変で、 α 線（ヘリウム4の原子核、正電荷をもつ）が放出される。ラジウム、ウラン、プルトニウムなどが α 壊変する。

α 線は大きな運動エネルギーをもち、細胞内のタンパク質や核酸（遺伝子の本体であるデオキシリボ核酸DNAなど）などの重要な高分子化合物に電離（化合物を構成する原子から電子が引き離される）や励起（電子が相対的に高いエネルギー状態に移動する）を引き起こして破壊し、その結果、細胞に損傷を与える。

放射線の直接作用である。一方、放射線が分子内の結合電子対を破壊し化学結合が切れると、遊離基（不対電子・をもつ原子または原子団、フリーラジカル、単

にラジカルともいう）が生成する。人体の主成分は水であり、生成する遊離基は、OH基やH基、水和電子などが多い。



（ \cdot は電子 e^- で、体内では水和電子）遊離基は極めて不安定で反応性が高く、他の遊離基や分子とすぐに反応する。ラジカル Radical」とは過激なという意味であり、したがって本質的という意味もある（なるほど、本質的であるとは過激であるということでもあるか、と大学時代に妙に感心したことを覚えている）。

生成したラジカルが細胞内のタンパク質や核酸などと反応して変化を引き起こし、結果として細胞に損傷を与えることを放射線の間接作用という。直接作用によるものであれ間接作用によるものであれ、損傷は細胞の修復酵素の働きなどにより一定修復されるが、すべての損傷が完全に修復されるわけではない。

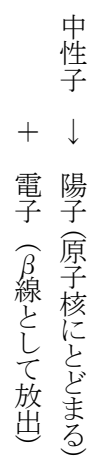
α 線の例：プルトニウム239（半減期：24,110年、何と長寿命であるか）

運動エネルギーは約5.17万eV（電子ボルトまたはエレクトロンボルトと読む、後で説明）、飛程は空気中で約3.7cm、人体組織中で約0.004cmである。飛程からわかるように α 線は空気中を長距離飛び回っているわけではないから外部被

曝の可能性は低い。しかし、これを放出するプルトニウムなどが体内に入ると、 α 線や β 線を放出しながら12の過程を経て崩壊するので長期にわたり極めて危険である。また α 線の体内飛程が極めて短いという意味は、身体構成物質にすぐに衝突し損傷を与えるという意味である。

(2) β (ベータ) 壊変

原子核内の中性子数が過剰 (逆に言えば陽子数が不足) の放射性元素の場合、



の壊変により β 線が放出される。ヨウ素131、セシウム137、ストロンチウム90などがこの壊変をする。

β 線は電子線であり、 α 線の粒子ヘリウム4の原子核に比べると桁違いに小さく軽い。電離能力等は α 線よりも弱い。

β 線の例：ストロンチウム90 (半減期：28.74年、骨に沈着しやすい)

運動エネルギーは最大で約54.6万eV、空気中の最大飛程1.4 μ m、人体組織中の最大飛程0.17cm。

ストロンチウム90の壊変で生成する娘核種イットリウム90 (半減期：64時間)

運動エネルギーは228万eV (β 線の中では最大級)、空気中の最大飛程8.8 μ m、

人体組織中の最大飛程1.0cm。外部被曝で問題になるのは主に眼の水晶体と皮膚、体内では放射体周辺0.1cmに β 線の全運動エネルギーが吸収される。

(3) γ (ガンマ) 壊変

γ 線は、普通、 α 線や β 線の放出のときに出る。 α 線や β 線を出すと、原子核がエネルギーの高い励起状態になり、安定な基底状態に戻るとき電磁波の一種である γ 線が出る。運動エネルギーは、電磁波(電波、赤外線、可視光線、紫外線、X線など)の中では非常に高い。電離能力等は、 α 線、 β 線よりもはるかに低い。

分子に吸収されにくいということ、逆に言えば、その物質透過能力は非常に大きい。電離や励起を直接的に引き起こすことはごくわずかであるが、二次的に生成した荷電粒子(主として電子)線による間接作用によって細胞の損傷が起こる。

γ 線の例：1999年の東海村JCOの臨界事故では、人体に0.14%ほど含まれるナトリウム23が中性子線と核反応を起こして自然界にはない放射性のナトリウム24が生成した。それが放出する γ 線の運動エネルギーは、約136.9万eV (および273.4万eV)であり、透過力は極めて高く、80cmの分厚いコンクリートで遮蔽しても1%は透過してしまふ。 α 線なら紙一枚で、 β 線なら厚さ1cmのプラ

チック板で完全に止まるが、 γ 線の場合にはかなり分厚いコンクリートや鉛板で線源(放射線発生源)を遮蔽しなければならぬ厄介さがある。

2 放射線のエネルギーと原子間の結合エネルギーのことなど

次に、放射線のもつエネルギーと物質をつくる原子間の結合エネルギーを比べてみよう。

(例示1) α 線のエネルギーは、水分子のO-H結合のエネルギーの100万倍も大きい。

α 線のエネルギーが500万eVという場合、1個の α 線粒子がもつエネルギー「ジュール」は次のようになる。

なお、eV(エレクトロンボルト)というエネルギー単位は、物理学分野の慣用単位である。1V(ボルト)の電位差の間を負極から正極に向かって1個の電子(エレクトロン)が移動したときに電子が電場から得るエネルギーを1eVという。

そのエネルギーは、負電荷をもつ電子は電場の中で等加速度運動をし正極板に衝突するが、その間に電子が得た運動エネルギーに等しい。その値は、次のように計算できる(計算過程はざっとみてください)。電子1個が持つ電荷(絶対値)は、

$$1.602 \times 10^{-19} \text{ (クーロン) だから}$$

$$1 \text{ eV} = 1.602 \times 10^{-19} \text{ [C]}$$

$$\times 1 \text{ [V} = \text{J / C]} \\ = 1.602 \times 10^{-19} \text{ J}$$

$$500 \text{ 万 eV} = 5 \times 10^6 \\ \times 1.602 \times 10^{-19} \text{ J} \\ = 8 \times 10^{-13} \text{ J}$$

ここで、1J = 1N (ニュートン) \times 1mであり、1Nの力で物体を1m動かすときの力学的仕事である。また、1N = 1kg \times 1m / s²で、1kgの質量の物体を1m / s²の等加速度で運動させる力である。sは秒(second)。

一方、例えば、水分子H-O-H内のO-H結合のエネルギーは、約460kJ / mol(モル)である。1molは、一般に、6.02 \times 10²³個の物質集団(原子、分子、イオンなど)を表す物質質量であり、結合の場合はそのだけの数の結合がもつエネルギーの総和であるから、**O-H結合1本あたりのエネルギーは、**

$$460 \times 10^3 \text{ J} / (6.02 \times 10^{23}) \\ = 7.6 \times 10^{-19} \text{ J} = 4.7 \text{ eV}$$

直ちにわかるだろう、500万eVのエネルギーをもつ α 線粒子1個のエネルギーは水分子のO-H結合1本のエネルギーの100万倍以上大きい。この α 線粒子のエネルギーは、水以外の他の分子内にあるどんな原子間の結合エネルギーよりも同様にはるかに大きいものである。 α 線

粒子が体内を走れば（外部被曝であれ内部被曝であれ）、DNAなどの重要な高分子化合物との衝突は避けられたとしても（当たれば直接破壊するが）、必ず体内の水分子には衝突し、その時どんな当たり方をして、水分子のOH結合は切れる。その時には、先に述べたように水分子の壊れた破片はラジカルや電子となり、それらは細胞にとって重要なたんぱく質等の分子を連鎖反応のように攻撃し破壊するだろう。

さて、水素結合とよばれる分子間の相互作用がある。水素結合は、物質を構成する分子内に正電荷を強く帯びた水素原子と負電荷を強く帯びた酸素または窒素原子があり、そういう水素原子と酸素または窒素原子が近い距離で向き合うように分子同士が接近するとき、分子間に作用する特別な分子間力である。水素結合のエネルギーは、水分子内のOH結合のエネルギーのおよそ20分の1の強さにすぎないけれども、一般のちっばけな分子間に働く分子間力に比べると10倍も強い。

水分子間にはこの水素結合が強く働き、その結果、水分子はちっばけな分子にふさわしくなく、0℃で凍り100℃で沸騰するなどという驚くべきふるまいをする。水分子間に水素結合が働かず、ちっばけな分子にふさわしいふるまいをするなら、水はマイナス120℃で凍り、マイナス80℃で沸騰するはずの物質であ

るだろう。水が水素結合をすることが、地球を地球（液体の水が大量にある星）にし、生命を生み出し存在させ、人類を誕生させた。地上の風景は、ありふれた水の奇跡の造形である。

水素結合は水分子間に働くだけではない。細胞内のさまざまな有機物、タンパク質分子の構造の維持に、したがってその働きに深く関係する。典型的な例をあげれば、DNAの2重らせん構造を維持する力も水素結合である。父と母から得た染色体がそれぞれ23個ずつ鎖状につながった2本のDNAの鎖は、チミン（T）とアデニン（A）、グアニン（G）とシトシン（C）という4つの塩基によってT-AおよびG-C間につくられる水素結合でつながり、2重らせん構造にねじれている。この水素結合の配列は、そのまま遺伝情報である。遺伝情報は、生きて行くために不可欠な情報で、細胞分裂のときには2本のDNAの鎖がサツと分かれて行き、片方の鎖がもう片方の鎖を正確に複製しそれらの鎖が新たに対になって元と同じ配列の2重らせん構造につながるという、ほとんど神業のような作業が精密に行われている。

水素結合は、水を、我々が常に何気なく見ているありふれた水にする不思議な力である。この水素結合は、遺伝情報を正確に伝えるために、DNA2重らせん構造を維持するに十分な強さをもち、細胞分裂時にサツとほじめて行くほどに適

度な弱さをもっている。物質が物質であるためには物質内の原子間の結合のような強い結合はなくてはならないものであるが、物質が秘めた力を発揮するには水素結合のような“ゆるい”力も不可欠なのである。そう思うと、世界を支配しているのはどっちの力かな。

結論的に言えば、放射線は、DNAの鎖内の原子間の結合を切り、またそれよりはるかに容易に2重らせん構造を維持している水素結合を破壊する。遺伝情報が切断されれば遺伝子異常が生じるだろう。

（例示2）放射線は生体内分子と1対1で勝負する

短時間の被曝線量が8グレイ（8Gy）になると、ほぼすべての人が死ぬといわれている。 $8\text{Gy} = 8\text{J/kg}$ であり、これは体重1kgあたり8ジュールの放射線エネルギーを被曝することを意味する。このエネルギーは、例えてみれば、1kgの水（人間は歩く水たまりであるから、おおざっぱに言えば身体1kgに相当とみてよいだろう）の温度を0.02℃上昇させる程度のエネルギーにすぎない。なぜなら、1cal（カロリー）とは4℃の水1gの温度を1℃上昇させるのに必要な熱エネルギーのことであるが、それは4Jであるからである。

また8Jのエネルギーについて別のたとえをすれば、このエネルギーは、私が

1kgの重りを80cmほど持ち上げるときに私が重りに対してする仕事である。さらに、私がその仕事を1秒でなしたとすると、私の仕事率（単位時間当たりの仕事）は8ワットである。いずれにしても8Jのエネルギーとは、河原の葦をそよ風が揺らしているくらいのエネルギーだろう、と思う。

熱エネルギーとして人に与えられればその体温を0.02℃ほど上昇させるくらいエネルギーであっても、放射線として人が浴びれば死に至るということはどういうことなのか。直感的に理解するにはもつと別の例えが必要だろう。

先ほどの（例示1）で、α線粒子1個のエネルギー $5.0 \times 10^{-13}\text{J}$ であることを示した。この計算で行くと、体重1kg当たり8Jの放射線を浴びるとは、体重1kg当たり500万個のα線粒子を 10^6 個（10兆個）浴びることに相当する。人間の体をつくる細胞数はおよそ60兆個というから、体重60kgの人なら、1細胞あたり10個のα線を浴びて少なくともその何倍かの数の細胞内分子が破壊されることでもある。そう考えると（これは全く非科学的な推測ではないと思う）、やはり、身体は相当の損傷を受けることになるだろう。

ちなみに、水1gの温度が1℃上昇するとき、水分子1個が受け取るエネルギーは、

4.184 J / (6.02 × 10²³ / 18)
 = 1.25 × 10⁻²² J

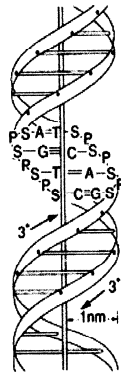
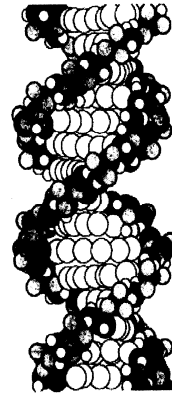
であり、1本のO-H結合の結合エネルギーの1/6000にすぎない。水の温度が100℃はおろか、1000℃上がったからといって水分子がぶつ壊れるわけではないのは明らかだ。

なお、(6.02 × 10²³ / 18) は、水1g中の水分子の数である。

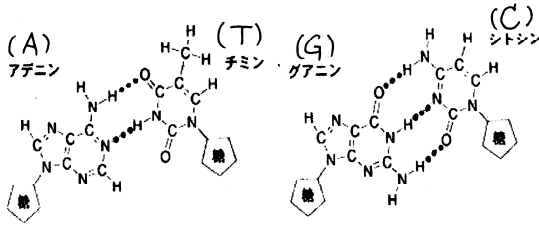
つまりは、こういうことになる。水を加熱するときには、膨大な数の水分子の全体がエネルギーを均一的にまんべんなく受け取る。したがって、分子1個当たりが受け取るエネルギーは限りなく(と言っても、限りはあるのですが) 小さくなる。一方、α線、β線、γ線などの放射線のエネルギーは、それに衝突した1分子(と言うのは極論で、その周辺の数分子かもしれないが)に1対1で吸収され分子に損傷を与える。ここに決定的な違いがある。

以上の話は、小出裕章著『原発のウソ』(扶桑社新書 094、2011年)に触発されて書いた。特に記して感謝し、紹介しておきたい。エネルギーの大きさだけから考えれば、体温をわずかの100℃上昇させるにすぎない放射線エネルギーを浴びて人が死ぬ、そのことをどうすればわかりやすく説明できるか、この素老人の宿題だと勝手に思った。久しぶりに一

所懸命で考えていたら、我ながら妙にまじめになった。だから、今回の話にはどこにもよもだがない。
 (かたちは心であり、心はかたちになる
 大分の素老人)



DNAの2重らせん構造



DNA塩基対間の水素結合
 (点線・・・)

哲学屋のつゆやき 5

〜ところと物質〜
 祖蔵 哲(そくら さとし)

人間の死というものを考える中で、自分自身の存在の消滅つまり死が、自分であるという私の「ところ」や「精神世界」目に見えないもの失う事とそれに伴って他者や物、自分自身の生身も含む目に見え感覚できる「物質世界」を失う事の二つがあるということを前回までに話しました。

哲学ではこのように世界を「精神」と「物質」に分けるのを「二元論」といいます。そしてこの二元論こそが近代人を支配している思想なのです。近代と言う言葉の使い方は近代化として使われるように、これは西欧と同じ意味です。近代とは一五世紀のルネサンスにはじまり一八世紀のフランス革命や産業革命を経て未だ続くヨーロッパ起源の人間中心主義の物質支配思想です。もちろん現在の私たち日本人もどっぷりとこの思考方法にはまっています。

一昔前に流行った歌「千の風に乗って」を知っている方も多いと思います。あの歌では魂はお墓にはいません、風になつてどこに浮かんでいると唄います。これが当たり前になって何も疑問を感じないほど日本人も近代的思考にすっかり浸かりきっています。一昔前は魂が単独で存在するという考えはなかったはずですが、常に何かと伴にあったのです。店主よつ

ちゃんが故郷の昔を語る時代にあつても、魂は山や木に宿っていたという事がうかがい知れます。だから田舎の夜道を歩くのは怖いのです。今では犯罪者で怖いのですが一昔前まではもののけが木々、岩や動物など自然物に宿り人間に悪さをしたのです。自然つまり「精神世界」と「物質世界」は一体で境界がありませんでした。「精神」と「物質」が考えの上で分離したのは人間の歴史からみればごくごく最近なのです。

「我、考える故に我あり」という言葉は哲学に縁のない方でも一度は聞いたことがあると思います。フランスの哲学者デカルトが考えたことです。デカルトは一七世紀の人ですが、一人彼だけが考えていたわけではなく、すでに西欧ではデカルトが考えていたことの時代背景があつたわけです。ヘーゲルというドイツの哲学者は「ミネルヴァの梟は黄昏に飛び立つ」と言っているように、哲学というもののは時代精神を後から説明するものなのです。

さて、このデカルトの言葉は有名ですがその本来の意味はあまりよく知られていません。少し難しくなりますがこの機会にわかりやすく説明しておきましょう。哲学者のデカルトはこの世界で本当に確実なものとは何かを真剣に考えた人のひとりです。前回にも話したように、この世界は誰かによつて意図的に作られて私自身も操られている、この世界は夢かもしれないとも考えられるわけです。この考えは誰も否定できないでしょう。デカ

教材と解釈の間

大江雉鬼

古池や蛙飛びこむ水の音 芭蕉

蕉風開眼を告げる一句である。有名すぎるほど有名なこの句を取り上げてくんだりやってみたい。とはいえ、材料が有名すぎると料理方法はいろいろなところで紹介されているので、へたにいじり回せば文字通りの「駄文を弄する」の結果にしかならない。そうした意味では、「古池や」を取りあげるのは難易度の高い課題である。

そもそも「古池や」の句が有名になっているのは、なぜなのだろう。イマ風の目線で見れば、小学校の授業でも出てくるからといったあたりが、もしかすると大きいのかも知れない。「五・七・五の字数からなる詩を俳句といいます」といった説明が必要になる段階でも取り上げられるくらいだから、もしそう言うことが許されるのなら「有名である」という属性が最初から備わっているとも言える。

もちろん、なぜ有名なのかに対して、最初から有名だと返してしまえば、答えになっていないと非られよう。だが、説明を拒絶する属性とでも言おうか、そんな絶対的なものは確かにあるし、それを具えている事象が世の中に存在することも否定できない。「古池や」の句が有名であることの理由をそういった文脈で語るのはさすがにムリがあるが、「古池や」の句の中にあつて人々を引きつけるものに

や魂、こころが一緒に入ることが可能だったのです。しかしデカルト、いや近代

の思考は「延長」の属性、すなわち性質には他のものが入り込めないとしたのです。なぜならやはり考える私のみが実体であり、私が考えるそれ以外のものはやはり疑わしいのです。ここから近代的思考が出發しました。以前の世界はある意味では実証主義であつて、目で見たり体験したりしたことそのままを説明していました。アリストテレスの思考です。鉄が落下するのはもともと鉄は地球の中心にあつたからとか、火が高く燃えるのはもともと火は天にあつたからとか。花は美しくあるために咲き、川は海を求めて流れるのです。

近代的思考は「精神」と「物質」を完全に分けた結果、物質世界は精神である人間の思考によつて考えるべき対象とされました。以前は物質には魂が宿つておりその働きによつてそれぞれの性質が決定されているとされたのですが、今やそうではなく別の法則があると認識されたのです。魂が排除された物質世界はすべて人間の思考対象となり支配すべきものとなつたのです。昔は心は心臓にやどり、怒りは肝臓にとかそれぞれの臓器に精神は付随していたのです。しかし、この近代的二元論思考が登場するや否や人間の体はすべて物質になり、解剖医学の単なる対象となりました。人間は機械じかけになつたのです。ここに産業革命、エネルギー革命をへて人間は、自然世界の征服者となり、これが今も続く西欧起源の

思考の正体なのです。

さて、なぜこの近代的思考が現在も世界を支配し続けているのでしょうか。そしてそれはなぜ西欧起源なのでしょう。私が考えるに一つは宗教が関係していると思います。以前にもお話ししたようにキリスト教などの一神教が根本的に他の宗教と違う唯一の創造神をもつことです。

それ以前はアリストテレス主義的なスコラ哲学、つまり決定論的世界観に支配されていたキリスト教は宗教改革を経て、デカルト思考を受け入れるなかで自然法則を知ることが即ち、これを創造した神を知ることであると理解しはじめたからなのだと思います。創造者の作つたパンドラの箱が開けられたのです。さらに人間の知りたいという欲望が自然科学を急速に発展させて来しました。しかしそれは物質世界の進歩に限定されています。二元論的世界では精神世界の進歩速度が物質世界のその速度に追いつかなかつたでしょう。しかし、一見して物質文明は進み世界は豊かになつていっているように見えますが、一方では遺伝子操作、原子力問題等々人類の生存そのものにかかる課題が山積しています。

いつもお話ししているように哲学はすべての当り前を疑います。歴史にもし、という言葉は適切ではないと思いますが、東洋的な自然と一体になつた思考のもとでは、自然科学はこんな速度では発展しなかつたでしょう。私たちが今、存在している世界は如何に作られ何のために在るのか。思考の旅をさらに続けましょう。

ルトもそう考えました。そして彼はそこから思考実験をはじめたのです。仮にこの世界が夢で誰かにだまされているとしても、そう考えている自分の存在だけは確実なのではないか。これがかの有名な言葉になりました。この実験は誰にでも何処でもすぐにできますからどうぞ皆様試してください。しかしその時少し注意しなければならぬことがあります。私が考えるから私は存在すると解釈しては間違ひです。机があるのは私がこれが机であると考えているから机がある、考えをやめれば机はなくなる、というふうに解釈してはダメです。これは従来からある、全てのものは不確実であるという懷疑主義です。デカルトはこの懷疑主義を克服しようとしたのです。そういう懷疑ではなくて、考える私はもうこれ以上疑えない、ならこれを唯一の真実として出發しようということなのです。これは方法的懷疑といつて全てを疑うことによつて確実なものを見つけないという実験なのです。疑うことが目的ではありません。ではそのことによつて何が変わったの、なんでこれがそんな大層なことなのと思われるかもしれません。

デカルトは考えている私、すなわち「意識」や「こころ」「精神」を確実なものとしようといいました。そしてそれ以外のものを「延長」としました。「延長」というのは奇妙な言葉ですが要するに縦、横、高さといった空間を確実に占有することになります。これがモノであり「物質」となり、それ以前はモノの中に「精神

は、どこか絶対的なものの香りも漂っている。

少々迷走気味なので話を具体的などころに戻しておこう。学校教材という話が出たのに合わせてのことなのだが、「古池や」の句を語る標準的な方法についてである。マニュアルがあるのかどうか知らないが、「カエルが池に飛びこんだ時の音にはどんなものだったでしょうか」や「古池とはどのくらいの大きさでしょうか」などの質問を重ねていき、最終的には「それではこの俳句の主題はどこにあると思いますか」といった形にもっていくのが、よくあるケースだと思う。二言めに「主題」だの「筆者の意図」だのを持ち出して、○×の分別に勤しむ風潮には反吐も出るところだが、国語教育の目指すところが解釈や鑑賞とは必ずしも重なるわけではないとしておけば、目をつむることもできる。ともあれ「カエルが古池に飛びこんだ小さな音を聞き、そのあとに広がる静寂が筆者にこの句を作らせたのでした」とかいったあたりが、正解として○を付けてもらえる答えになるはずである。

子供にとっての言語経験を豊かにするには、文字で表現されたものを文字だけで終わらせるのではなく、描かれた世界を具体的に映像化する力をつけさせることなのだから、そのケーススタディと考えば「古池や」の一句は最適な教材である。そして一応の到達点を示す解答に静寂感を求めるのも、あながち領けないわけではない。しかし、その「古池や」

の一句は歴史的な文脈に置いてみると、教材として見る時とは微妙に違った見え方がするのである。

芭蕉がこの「古池や」の句を得たのは貞享三年（一六八三年）のことだった。同年閏二月の刊記をもつ「蛙合（かわずあわせ）」という句合があり、「古池や」の句はその冒頭を飾る。

一番

左

古池蛙 飛こむ水のおと

芭蕉

右

いたいけに蝦 つくばふ浮葉かな 仙化

此ふたかはづを何となく設たるに、四となり、六と成て一卷にみちぬ。かみにたち下におくの品 をのをのあらそふ事なるべし

たまたま作られた芭蕉吟が世間で高く評価され、そこに趣の異なる蛙の句を番わせてみると、句合のようになって蛙の句が二句、四句、六句と増え、最終的に完成したのが「蛙合」の一冊であるとのこと。そうした「蛙合」の成立事情を念頭においてみると、「古池や」の句は、横に並べられた仙化吟と比べることで、描くところが浮かび上がってくるのではない。すなわち、浮葉の上で可愛らしくじつとひれ伏すカエルの図との比較である。これがまったく動きのない静けさであるとすれば、芭蕉吟の方は跳びはねてポチャンと音を立てた動きにこそ眼目があるように思われる。少なくとも、同時

最近の新聞少し変です

駒田明克

小生、これまで、原稿を書くにあたって、政治的な話題にはなるべく触れないよう心がけてきました。その中で、少しは“老人の戯言”と称して社会情勢について批判めいたことも書いてきました。

しかしながら、もうストレスがたまっています。書き出したら、限がありませんが、その中で、最近特に感じていることを書きます。

小生宅では、中日新聞を購読しております。これは、その記事がこれまで比較的一方へ偏らない報道姿勢を取っているという小生の理解があったからです。よく市の図書館で事があると、各紙を見比べます。小生の理解では、朝日も毎日赤旗なみの記事を書いています。

しかしながら、中日新聞、今年に入ってからその論調がなにか変に感じます。三年前、あれほど自民党をボロクソに叩いて誕生した民主党政権、自分らの無能さにも気付かず、世界一有能な官僚集団を叩いて、自由に自分らの手足として活用できず、事ある度に、右往左往の連続。このガラクタ政権の正体によく気付いた国民が、先の総選挙、参議院で自民党の圧勝をもたらしました。

それが、ひとたび自民党が政権を取り戻し、安部政権が誕生し、アベノミクスといわれる成長戦略を立て、デノミ脱却へ向けて動き出すとするに当たって、中日新聞だけでなく各マスコミはこぞっ

て政策が具体的に動き出す前から、マイナス思考の論評。

これらマスコミは日本がどうなっても良いのか。これ以上魅力のない国になっても良いのか。全く建設的な意見も出さず、無責任極まりない。

その後も、成長戦略の効果が、なかなか我々の収入アップにつながらない等と、高給取りの最たるマスコミの連中がのたまうから、笑止千万。

これまで、長期間低迷してきた経済を立て直すのに、あまりに結果を性急に求め過ぎます。それとも、不偏中立を装って情報操作をするメディアの常套手段が始まったとまで思ってしまうです。

ここへきて、特定秘密保護法案をめぐってマスコミの動きも、異常とさえ感じます。

連日の新聞報道たるや、この法案が通ると、まるで戦時中に逆戻りし、我々の言論は封じられ、まるで、恐怖政治へまつしぐらとの印象を与えています。

小生も心配になり、法案の全文・修正案も全て読んでみましたが、小生の国語の理解が不足しているのか、決してそのような主旨の法案ではありません。

昨年の11月27日の中日新聞は一面から31面の社会面までこの特定秘密保護法案のオンパレード。

一面の大見出しは「秘密保護法案衆院通過」小生このみだしを見て、すぐ気がついたのは、特定という文字が省略されていることです。何故かと中日新聞に聞けば、きつと字数の制限で省略したとの

回答が来るでしょう。しかし、それだけでしようか、特定のことばを外すことによつて、法案まで読んでいない読者に敢えて恐怖心を与える意図さえ感じました。

二、三面では大見出しで「止められぬ野党無力、決められる政治横暴、国民の不安、数で黙殺」小見出しで「戦争に走る法案だ」

社説では「国民軽視の強行突破だ・特定秘密保護法案」との見出しで、広く疑念の声があがる特定秘密保護法案が衆院の本会議で可決した。巨大与党が力づくで、渦巻く反対論をねじ伏せたのだ。強行突破は看過できない。と述べ、議員こそ反対の先頭に」とまで述べております。

さらに、「軍事面に過度に傾いている法案であるうえ、安部晋三内閣は来年にも集団的自衛権の行使が出来る『国家安全保障基本法案』の提出をめざして、平和主義とも相いれないはずだ。と力説。

社会面では大きく「世論に耳貸さぬのか、なぜそんなに急ぐ」と大きく見出しをつけ、市民の声として、元教師（86）の戦争中に逆戻り、平和人権団体（78）言論の自由を脅かす、弁護士（30）の法案は政府による情報操作や言論統制へつながり戦中の暗黒社会へ導かれる不気味さを感じる。市民団体代表（78）の戦争中の大本営発表のように一方的な情報を流されるようになるのではないかと等と反対派の意見のみ載せ、国民の「知る権利」が侵害されかねないという疑念は晴れぬまま。「国民を愚ろうしている」蚊帳の外に置かれた市民団体や識者たちからは、

怒りや失望の声があいつだ。との反対論中心の記事になっています。

中日新聞のこの記事を見ると、まるで特定秘密保護法案が戦前の治安維持法と同じという扱い方。

この特定秘密保護法案、12月6日参院で与党が深夜の採決強行により成立しましたが、12月7日の中日新聞朝刊では。

一面大見出し「与党深夜採決強行、知る権利侵害懸念残し…」。

世論は屈しない。論説主幹 深田実 社説、民主主義を取り戻せ、国民を奴隷視か、改憲に至る一步。

社会面、有権者裏切った、反対諦めない、子のため、抑圧されても、

小生、これまで新聞報道については、つねづね疑問を抱くこともありましたが、ここまできると、本来不偏中立な立場で冷静に分析して報道するのが、新聞の務めと考えるが、もう常軌を逸していると思わざるを得ません。

戦前、これとは逆に、新聞は国威発揚を煽つて、戦争へ突入させたことを若い記者諸君はお忘れか。

今、日本を取り巻く情勢は、大変不安定なものがあります。

隣の北朝鮮では、我々の平和国家ではありえないナンバー2の粛清が現実になり、これから国内の恐怖政治が始まりそうです。また、ミサイル発射、核兵器開発も現実味があります。中国の尖閣問

題、韓国の慰安婦等歴史問題など改善の様子が見られません。

こういった対外情勢のなか、政府として、中東問題も含めて、いち早く正確に情報を集め対応する必要があるのは、小生でも分かります。

諸外国のような諜報機関を持たない平和ボケ国日本では、せめて信頼のもてる同盟関係にある国から、いち早く情報を入手して、日本として後手をとらないよう対策をとるのは、何ら無理なことではありません。

しかしながら、現状では各国の最高機密情報を日本に伝えると直ぐに情報管理の甘さから他に漏れる怖れがあります。そうした状況では、同盟国からも重要な情報は入りにくくなります。

そういったことから、これではいけないということで持ち上がったのが、今回の特定秘密保護法案です。参院通過後、なぜ性急に法案の成立を急いだかとのマスコミの問いに、安部首相はもつと、丁寧に国民に理解を得る必要があったんじゃないかと反省している。と言われましたが、これは小生からみれば、いささか弱気すぎ、もつと堂々と、毅然としてもらいたかったところです。

最近の新聞少しへんですね、のテーマにもどりますが、中日新聞は今年になって何があったのでしょうか。我が家では他紙よりも地方の記事が多いという理由だけで、しかたなくこの新聞を購読し続けておりますが…。

挨拶回り

明石幸次郎

転勤の挨拶回りを終えて急いで、席に戻ると、Mさんが厳しい表情で「おい、今からTちゃんと、打ち合わせルームで中国関係の引き継ぎをするぞ。ノートを持って直ぐに行こう」と行き成り言われた。明石はカバンから新しいノートを取り出し、Mさんの後について、打ち合わせルームに向かった。

部屋に入るとTさんがニコニコ笑いながら「明石君も忙しいなあ。転勤早々社内のおちこちと挨拶回りか、ご苦労さんやなあ。挨拶をちゃんと、やっておくことは、エエことやで。ここの輸出部の若い連中に一番欠けるのは、ここや。礼儀作法、挨拶が出来ん奴が仰山おるわ！なあ、Mちゃん？これは、課長連中の部下に対する教育がなっていないからやで」と明石は挨拶回りを、Tさんに褒められたが、この上司批判の様な言い方に驚いた。Mさんはそれに同意して「Tちゃんの言う通りや。特にA産業から来た連中は偉そうに管理職になつてるが、部下の教育は、出来ていない、野放しや。この若い奴は放し飼いやで。Aから来た人は自分らの出世の事しか考えてない。商社出身の連中は信用出来んわ。ウチのNなんか、Aさんに甘やかされて、真面に

仕事が出来てないし、応対もなつてない。電話でM商社のKと半日喋つてるわ。それで、商売になれば、ええけど。俺が注意しても聞き入れないわ。人間、最初に入つて来た時の教育が大事やなあ」と引き継ぎより、若い社員に対する批判とそれを教育すべき課長連中が何もやっていない、という話になつてTさんとMさんはお互いの考えが一致して、話が盛り上がってきた。

Tさんは、それから本題に入り「それで、中国の引き継ぎやけど、Mちゃん、中国も去年の末の商談でAさんが強気になつて値上げしようとしたんや。しかし、中国側は折角日本に来て商談して、値上げして帰つたら、彼らの立場が無くなるやろし、下手したら、今の体制では連中は皆左遷させられると言われていたんや。それやのに、Aさんは、功を焦り、俺が商談するんやから、値上げすると意地を通したもんやから、中国側はライバルメーカーにコンタクトして、見積もりを取つたんや。それがウチより安かつたもんやから、連中も逆に強気になつて、指値されて、この値段を飲まないと全量他社から買うと、今度はAさんが中国側に脅かされた。結局、Aさんは折れざる得なくなり、前回価格を大幅に下げさせられ、しかもライバルに四割の数量を持つて行かれてしまった。ウチは毎年、技術指導に人を数か月中国に送り込み、サービス活動に金をかけていたのに、他社は何も

していないのに、踏んだり蹴つたりやで。しかも、競争相手のライバルが二社に増えてしまったんや。今年から四社の競争や、しんどくなるで。悪いけど、俺は引き継ぐから、肩の荷が下りて楽になるわ」と笑顔で最後は話が終わった。

明石はノートを取るうとシャープペンシルを動かし、商談ライバルが二社増え、価格前年比大幅下げ、と書いただけでTさんの話を聞いていた。

Mさんが「Tちゃん、エライAさんの失態やないか？そんなん、責任問題やないか？相手は体制が共産党に変わったと言えどあいつ等は、華僑の血が流れているやないか？強気一辺倒になつても、連中もアホやないで、情報は持つていけるで、ライバルを引き合いに出し、当然、ウチに揺さぶりを掛けてくるわなあ。そんな常識やないか。それも予想せず、交渉して、上手く行く訳はないわ。Tちゃん、事前に何か商談の時にAさんと話合つたの？Aさんは韓国の件で俺ばかり責めて、最後は韓国側を怒らしたと言うことで責任取らされたが、自分らは何や！やつとられへんわ」と言った。

それに対しTさんは言い訳がましく「いや、商談は東京でK部長とAさんが二人で出向き、俺は蚊帳の外や。商談には出ていないので、話し合いも何も無い。Aさんがこれで決まったので、工場に連絡して、直ぐに製作にかかってくれと言われただけや。Mちゃん、俺が尻拭いを

させられて、U工場とのやり取りが大変やつたんやで。分かるやろ。工務のH課長相手やで。こんな価格では工場は赤字や作られへんとエライ叱られて、結局、工場長宛てに部長名で一筆書いて、やつと了解して製作に掛かつて貰つたんや。今年の商談は、頑張つて値段を上げて貰う様に、今から作戦練つておいてなあ」と揉み手になつて最後は値段を上げることをいたく強調した。

明石は二人の発言を聞きながら、Aさんが課長でT、Mは二人とも係長で、何故か、Aさんとのコミュニケーションが日頃からなされていないように感じて、その下に自分はいるので、どうやって自分の考えを権限のある課長まで持つていけるのか、この課内でも大きな課題であると思つた。

最初にK部長は、明石に「君がどの様に担当した国の絵を描くかに、市場拡大がかかっているんやで。担当者が社内、ライバル会社よりも一番に情報、人脈など持つて、日頃から問題意識を持つて勉強しておかないといけない。それと仕事は自分が上司や、商社をどう動かして行くかやで。動かされているだけだと仕事は面白くないぞ。人、物、金を動かせるような、サラリーマンになれ」と激励されて、自分もそうしたいと思つたが、引き継ぎの初っ端に二人の先輩の対応と話の内容に、K部長の話とのギャップを感じて、少し落胆した。